『新釈 走れメロス 他四篇』 経済学部4年・対馬正騎さん紹介

私が紹介する、新釈走れメロス。どういう所が新しい解釈なのかを説明していきます。

京都の大学生芽野史郎（原作でいう所のメロス）は、世にも破廉恥な刑に瀕し、人質となった親友を見捨てるために、全力で京都を疾走します。原作の「親友との約束を守るため」ではなく「見捨てるため」に走る。これは内容がガラッと変わる新しい解釈ではないでしょうか。ここで、みなさんの中に2つの疑問が出てくるのではないでしょうか？「原作を知らないと面白くないのでは？」ということです。大丈夫です。この本では「走れメロス」他、有名な文学作品を基にした4篇が収録されています。私自身この本を読むまで知らなかった作品もありますが、興味深く読むことができました。また、「コミカルな話で読みごたえないのでは？」と思われる方がいるかもしれません。それも大丈夫です。表現が秀逸で、面白い場面がたくさん出てきますので、読みごたえも十分あると思います。

『新釈 走れメロス 他四篇』森見 登美彦 KADOKAWA／角川文庫

『後宮の烏』 文学部3年・小熊由樹さん紹介

私は本を選ぶときは表紙の絵を見て決めており、ミステリアスな黒い服の女の子に惹かれてこの本を選びました。

主人公は後宮の妃の寿雪(じゅせつ)という少女です。彼女は妃でありながら夜伽をすることのない烏妃(うひ)と呼ばれる特別な妃で、不思議な術を使って自殺から偽物探しまで引き受けてくれるという謎の存在でした。物語の中で寿雪と皇帝の高峻(こうしゅん)の2人が出会うのですが、この出会いが寿雪の運命を変えることになり、2人の生きている時代の世界をも変えてしまうような出来事の始まりとなります。物語が進むにつれて変わっていく2人の関係性の変化に注目して読んで頂きたいです。また、ずっと1人でいた寿雪が事件を解決していくなかで様々な人々に触れて心を開いていくのですが、不器用ながらも仲間との時間を大切にしようとする寿雪の姿も見どころの1つです。この本はシリーズものです。キーワードである『烏妃』についての秘密がシリーズ内にちりばめられていますので、ぜひ続きも読んで下さい。

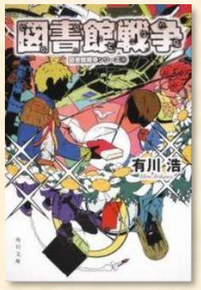
白川紺子 『後宮の烏』（集英社オレンジ文庫）

『図書館戦争』 人間科学部3年・藤井菜々海さん紹介

この作品の世界では公序良俗を乱し、人権を侵害する表現を取り締まる目的で「メディア良化法」という法律が制定されます。また、「メディア良化委員会」という組織によって、メディアの検閲が行われていきます。委員会に対抗し、「図書隊」という部隊が作られ、ここに新しく入隊してくる笠原郁という女の子が主人公です。

魅力の1つ目は、現存する図書館法に新たな章が追加成立しているなど、設定がとても細かく作りこまれている点です。作品の中でこれらの法律をもとに様々な行為が行われていきます。2つ目は、人間味溢れる素敵なキャラクターです。とにかく真っ直ぐでいろんなことに愚直に取り組んでいく笠原郁と、その郁を優しさゆえの厳しさで見守っていく教官の堂上など、魅力的なキャラクターがたくさん登場します。3つ目は、キャラクターが織りなすフッと笑ってしまう会話劇やハッとするような名言の数々です。特に私が好きな言葉は「正論は正しい、だが正論を武器にする奴は正しくない。お前が使ってるのはどっちだ?」という堂上の言葉です。

この作品は漫画や映画などでも楽しむことができますので、ぜひこの世界観を味わってみて下さい。



『図書館戦争』 有川 浩 KADOKAWA

『悪童日記』 法学部2年・秦未来子さん紹介

タイトルが“悪童”とついているのでいたずらっ子の日記かなと思いましたが、この本は戦争を描いた物語です。

戦渦の中、双子の少年が小さな町に住んでいる悪評高いおばあさんのもとに疎開します。ここで様々な恐ろしい場面に出会い心を閉ざしていくのですが、そんな中で生き抜こうとする少年たちは、勉学のため日記を書くことにします。その際、少年たちは自分が見ている景色や感情を一切入れず、物象や人間や自分自身の描写、つまり “事実の忠実な描写だけにとどめる“ といったルールで日記を書いていきます。最初はどうして感情を書かないのだろうと思っていましたが、実際に最後まで読み終えてみると、感情がないというそのことこそが、戦争の悲惨さや不条理さを非常に具体的に表していると気付きました。そして、双子の少年という子供の純真無垢な目線から描かれていることで、戦争の愚かさや戦争をしてはいけないという事をありありと伝えてくれる、そんな1冊です。

戦争の話は硬そうで手が出しづらいという方は、こちらの悪童日記を手始めに戦争について考えてみてはいかがでしょうか。

アゴタ・クリストフ著，堀茂樹訳
『悪童日記』
（早川書房／ハヤカワ epi 文庫）

『家庭教室』 法学部2年・向井田彩音さん紹介

主人公は灰原巧という大学2年生です。彼は塾講師をしていましたが、塾との契約に違反し、退職に追い込まれます。この物語はそんな彼のもとに家庭教師の依頼が舞い込むところから始まります。担当する生徒たちは様々な問題を抱えていますが、彼はその問題を探偵のように解決していきます。

早く大人になりたいと話す女の子に「子供にも大人のような部分があって、大人にも子供の部分がある。子供と大人の間はグラデーションだと思うよ。」と話すところがありますが、私たちも実際そうではないでしょうか。私はこの作品を通して、自分の進路を考えることも、大人になる一歩なのではないかと思いました。私自身も就職活動を控えていますが、登場した生徒たちのように自分の将来を一生懸命考えて、少しでも大人に近づいていけたらいいなと思っています。

子供の頃、大人ってどんな風に見えていたんだろうなと思い出すきっかけとして、いま大学生のあなたに、子供と大人の間にいるあなたに読んでほしい1冊です。

『家庭教室』 伊東 歌詞太郎
KADOKAWA

参加された育友会本部役員の方々から感想をいただきました！

この度のビブリオバトルはコロナ禍で様々な活動が制限される状況での企画となり、発表者の方々、図書館関係者の皆様、本当にご苦労様でした。この企画への参加を大変楽しみにしていました。人に本を薦めるには自分がその本を非常に好きだとか、何か強く感じる点がないと難しいものです。発表では6人6様の本に対する熱い想いが伝わってきて感激しました。これからも図書館運営に携わり、よりよい本を多くの人に紹介していただきたい。お招きいただきありがとうございました。

（副会長 江尻 征志 様）

5分間の限られた時間で本を紹介することはとても大変ですが、6名のみなさんには共感や反感などの想いを自分の言葉で相手に伝える非常によい機会でした。また、論理的な物事の考え方や思考を試されるトレーニングになったかと思います。自分の想いをきちんと解釈して話すことは、これからの長い人生の様々な場面で要求されます。そういう意味では、今回のビブリオバトルという形の中で自分の思いの丈を伝えられたことはよかったと改めて思います。また機会があれば参加したいと思います。

（副会長 小海 祐資 様）

専修大学図書館ボランティア Compass

みなさんにとって利用しやすい図書館になることを目指し、「業務サポート」「展示」「館内整備」の3班に分かれ、現在60名の学生たちが活動しています。

<新規メンバー募集中>

Compass では一緒に活動するメンバーを募集しています！ 学部・学年、所属キャンパスは問いません。
興味のある方は各図書館カウンターまたは E-mail（QR コード参照）からお気軽にお問い合わせ下さい。